

令和7年度 校内研究計画 ver.1

個別最適な学び部

I 研究主題

挑み、やり抜き、認め・支え合う子ども（2年次）
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～

2 研究主題設定の意図

(1) 教育目標から

生成AIの台頭、ビッグデータ、Internet of things (IoT)、ロボティクス等の先端技術の高度化している。あらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあると言える。社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じてきている。このような潮流の中、子どもたち一人一人が、自己実現を果たし、社会の一員として活躍していくために必要な力の基礎を育むため、約50年ぶりに教育目標の見直しを図った。

見直しに当たっては、社会の要請、児童の実態、保護者アンケート結果等に基づき、児童に求める資質・能力を洗い出した。そして、その資質・能力を「挑む力」「やり抜く力」「認め合う心」「支え合う心」の4つに整理し、教育目標「たくましく 美しく」を掲げた。4つの資質・能力は、三つの柱である学びに向かう力・人間性等に位置付けられる。三つの柱の中でもとりわけ、学びに向かう力・人間性等に重点を置いて教育活動を推進していくことが掲げられている。

(2) 昨年度研究から

昨年度研究は、二期に分けて実施した。研究第一期は、日本生活科総合的学習教育学会に向けて生活科と総合的な学習の時間の実践に重点を置いた。研究第二期は、各教科等において個別最適な学びに重点を置いた単元づくり・授業づくりを行った。1月と2月の研究全体会及び教職員のアンケートを踏まえると、2年次研究において全校体制で取り組んでいくべき内容が見えてきた。それは、子どもが「どのような学び方をしたら、何が分かったのか（できたのか）」を自覚することが必要であるということだ。学習過程における自分の成長を自覚した子どもは、他の目的や場面でも同じように学ぶようになっていく。具体的な研究内容及び方法については後述する（昨年度研究の成果と課題については別紙1参照）

(3) 児童の実態から

昨年度研究において、子どもたちは次のような姿で学んでいた。

1年生：国語

国語の学習で、物語を読み深めていくとき、自分に合った読み方を自ら選択した上で、設定された時間いっぱい集中して教材に向き合う姿

【挑む】

5年生：体育

体育のボール運動では、チームの課題を見付けて、さらによりプレーにつないでいこうと工夫して練習する姿

【やり抜く】

4年生：総合

総合でロイロノートの提出箱を活用して、友達の意見を分析（他者参照）して、同じ考え、優れた考え、質問したい考えに分類し、相互交流していた姿

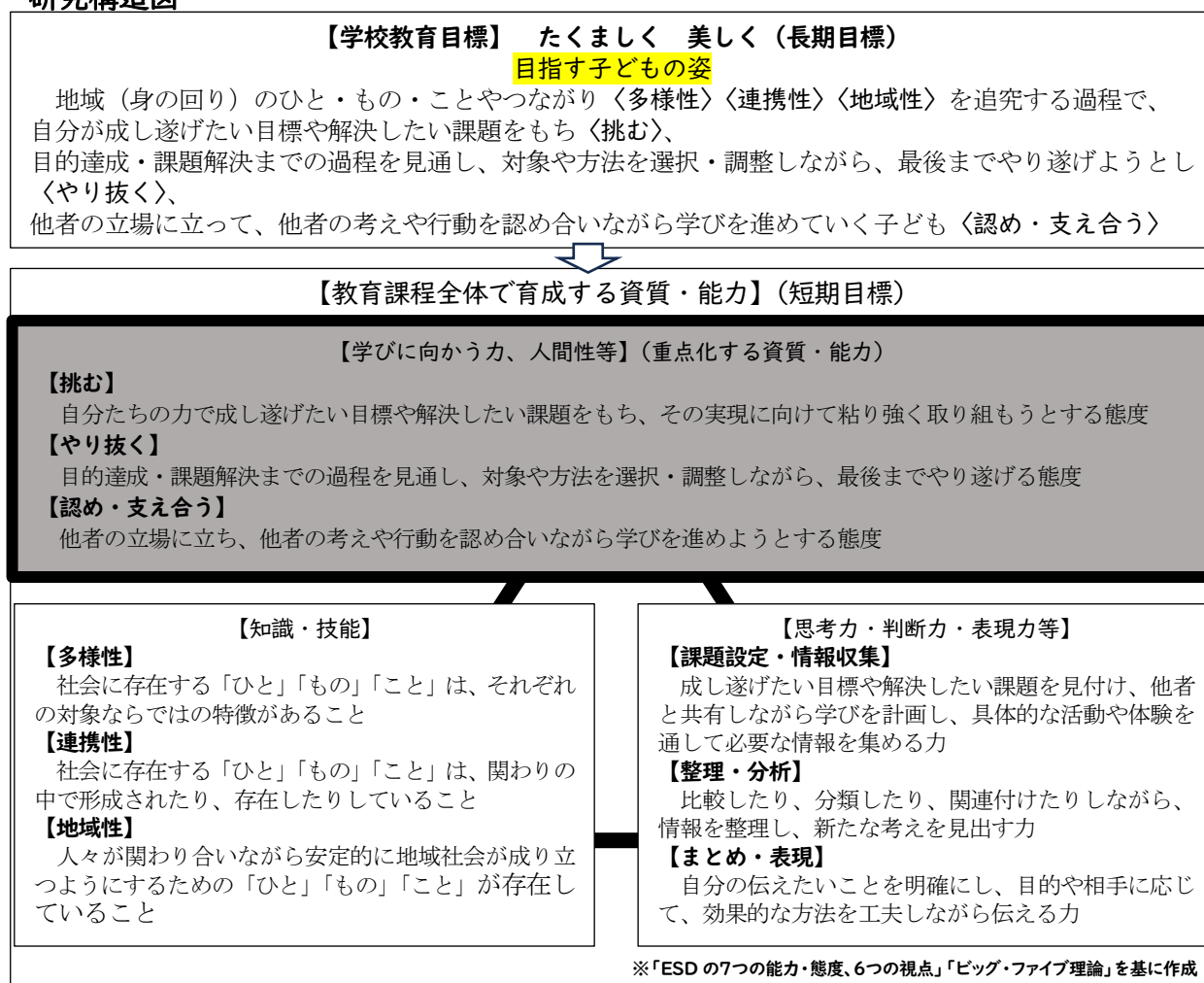
【認め・支え合う】

上述のような「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿が教育活動の中で随所に見られる。職員研修において、上述の姿を言語化し、見取ることができるレベルで共有を図り続けてきた。また、実際

の教育活動において「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を引き出そうと全職員で取り組んできた。昨年度の取組によって当校の子どもは確実に教育目標に近付いている。二年次研究では、子ども自身が「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」ことの意味や価値を自覚するところまで目指したい。なぜなら、学びに向かう力、人間性等は、充実感や達成感などのポジティブな感情と結び付くことで「またやってみよう、いつでもやってみよう」と安定するからである。学びに向かう力、人間性等の涵養は、教師の高度な指導性と子どもの自覚の両輪によって成立する。

教育目標や昨年度研究の成果と課題、児童の実態を踏まえて、今年度も、目指す姿を「挑み・やり抜く、認め・支え合う子ども」とし、2年次研究を進めていく。

3 研究構造図



4 研究内容

（0）はじめに

◎教師の学びと子どもの学びは相似形

2年次研究を進めるうえで大切にしたい言葉である。子どもは、これまでの知識や技能、経験を基にして、成し遂げたい目標を達成したりや解決したい課題を解決したりしていく。成し遂げたい目標や課題に向き合う子どもの心の中は「ワクワク」の連続である。教師も同じではないだろうか。教育目標の具現に向けて、自分の専門教科を中核として授業観と子ども観を更新していく毎日の方が「ワクワク」するに違いない。二年次研究では、子どもと教師が「ワクワク」する研究を進めていく。

◎子どもは有能な学び手

元文部科学省主任視学官の嶋野は、著書の中で次のように述べている。

子どもは本質的に知的好奇心に富み、意欲的で能動的であり、有能な学び手である。内に様々なよさや可能性を秘め、それらを発揮し、よりよく生きたい、向上したいと願っている存在である。こうした子ども観は、他から説明されただけでは身に付きにくい。教師自らが愛情をもって子どもに接し、子どもの世界に驚嘆するなどして確かなものになる。

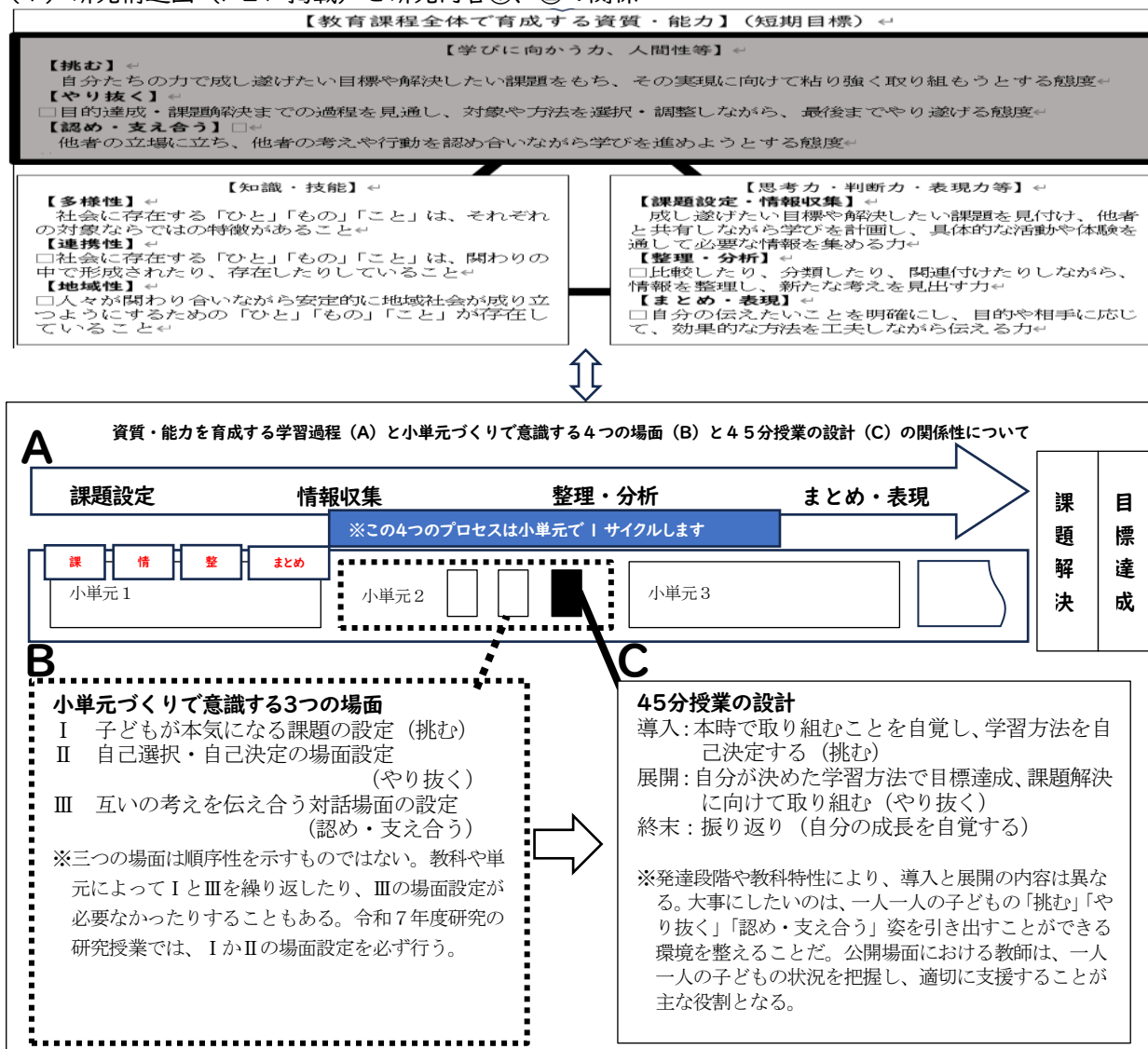
前述の授業観と子ども観の更新につながる言葉である。これまでの一斉授業と同じように、教師の指導性を発揮して、子どもを教え導く場面は存在する。これまでの一斉指導も大切にしつつ、これまで以上に子ども一人一人の学びの状況を把握し、適切に支援していく授業を増やしていきたい。それが、「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を涵養していくことにつながると考える。

前述の2つを全職員で大切にしながら研究を進めていきたい。

令和7年度 二年度研究 研究内容

- ① 研究教科において重点単元を設定し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を意図した単元を構想し、実践すること（研究教科は、各自で設定）
- ② 子どもの「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を引き出し、自覚を促す授業を繰り返すこと

（Ⅰ）研究構図（P2に掲載）と研究内容①、②の関係



(2) 単元づくり

① 研究教科において重点単元を設定し、単元構想力を高めること

①計画

重点単元とは、涵養を目指す学びに向かう力・人間性等の発揮が最も期待できる単元のことを意味する。年間指導計画に、〈挑む〉〈やり抜く〉〈認め・支え合う〉を書き込み、P3で示した研究構造図の関係性を意識して単元を構想していく。

算数 175	①対称(12) ②文字と式(8) ③分数と整数のかけ算とわり算(8) ④分数×分数(10) ⑤資料の整理(6) ⑤分数÷分数(7) ⑥小数と分数の計算(5) ⑦ならべ方と組み合わせ方(6) ⑧小數と分数の計算(5) ⑨比とその利用(9) ⑩拡大図と縮図(9) ⑪比とそれの利用(9) ⑫比とそれの利用(9) ⑬比とそれの利用(9) ⑭比とそれの利用(9) ⑮比とそれの利用(9) ⑯比とそれの利用(9) ⑰比とそれの利用(9) ⑱比とそれの利用(9) ⑲比とそれの利用(9) ⑳比とそれの利用(9) ㉑比とそれの利用(9) ㉒比とそれの利用(9) ㉓比とそれの利用(9) ㉔比とそれの利用(9) ㉕比とそれの利用(9) ㉖比とそれの利用(9) ㉗比とそれの利用(9) ㉘比とそれの利用(9) ㉙比とそれの利用(9) ㉚比とそれの利用(9) ㉛比とそれの利用(9) ㉜比とそれの利用(9) ㉝比とそれの利用(9) ㉞比とそれの利用(9) ㉟比とそれの利用(9) ㊱比とそれの利用(9) ㊲比とそれの利用(9) ㊳比とそれの利用(9) ㊴比とそれの利用(9) ㊵比とそれの利用(9) ㊶比とそれの利用(9) ㊷比とそれの利用(9) ㊸比とそれの利用(9) ㊹比とそれの利用(9) ㊺比とそれの利用(9) ㊻比とそれの利用(9) ㊼比とそれの利用(9) ㊽比とそれの利用(9) ㊾比とそれの利用(9) ㊿比とそれの利用(9)</									
-----------	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--

なお、研究教科については各個人で設定する。生活科と総合的な学習の時間については、今年度も学年で構想して実践する。一人一実践や研究授業、目指す子どもの姿を具現するために重要なところである。

生活科と総合的な学習の時間は、〈挑む〉〈やり抜く〉〈認め・支え合う〉の三つを記載する。その他の教科等においては、〈挑む〉〈やり抜く〉〈認め・支え合う〉のうち一つ以上を記載する。

②実践と修正

4月段階で計画した単元について実践を行う。夏休みまでに研究構造図を意識した授業を実施したり、参観したりした経験を踏まえ、悩みや難しさも含めて共有する。(大研授業、一人一実践、日々の授業実践)

(4) 授業づくり

② 子どもの「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を引き出し、自覚を促す授業を繰り返すこと

①計画

A: 資質・能力を育成する学習過程

→課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現という探究のサイクルである。子ども自身が、課題解決や目標達成をゴールとしたとき、「今、自分はどこにいて、課題解決や目標達成のために何が必要なのか」「どのような学び方をしたら、何が分かったのか(できたのか)」を自覚できるようにしたい。そのために、4月から☆の内容を意識し、学年で情報を共有しながら始めてほしい。

☆子どもが学びの計画を立てて、実行すること

例) 1:「子どもと一緒に学習過程を決める」 2:「一人一人の子どもに学習過程の決定を委ねる」

資質・能力の発揮



資質・能力の自覚

☆子どもが自分の学びを振り返ること

スプレッドシートで一人一人の学びを可視化し、共有すること(※発達段階に応じて、ワークシート等のポートフォリオでも可)

B: 小単元づくりで意識する3つの場面

→「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を引き出すための枠組みと捉えてほしい。

令和7年度研究の研究授業では、IかIIの場面設定を必ず行う。

C: 45分授業の設計

→教師の指示や発問を前提として授業を設計するのではなく、子ども一人一人が45分の授業で何をしたいと考え、どのように学んでいるのかを見取って関わっていく。したがって、指導案の形式や参観の仕方も従来と異なる。詳細は後日示す。

②評価と分析

本時においては、振り返りの子どもの記述や授業中の発言から子どもの姿を評価する。想定した姿を見取ることができる評価方法を考える。子どもの姿を分析した結果、「何が有効だったのか」「改善点は何か」をまとめて、提出する。フォーマットは後日、提案する。

(5) 研究を支える取組

「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」という課題解決の過程において発揮される姿を涵養していくためには、子ども自身がどのような状況のときに何を使うといいのか（どうするいいのか）を自覚している必要がある。そのために、本年度は研究を支える取組を共有して進めていく。

① 情報スキル目標体系表を基に学習方法を自学級化していく

情報スキル目標体系表を作成した。(別紙2) この力を育成するために、何ができるのかを考えて実行していただきたい。そして、必要に応じて子どもが選択しやすいように掲示物を作成するなどしてほしい。個別最適な学び部で時期を見て集約し、職員に紹介する。

② 学びの可視化

スプレッドシートを活用し、一人一人の学びを可視化し、共有できるシステムを構築していく。子どもに「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿の自覚を促す。そして、「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」ことの意味や価値を実感し、「いつでもやってみよう」などと安定して資質・能力を発揮する姿を期待する。

③ 学びの軌跡の掲示

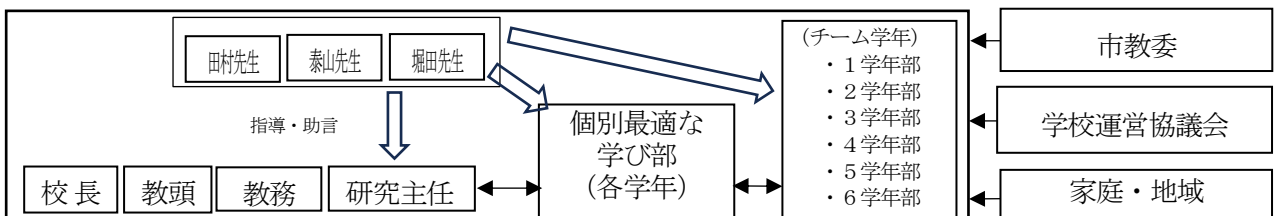
自分の研究教科の時間の掲示物を全校で統一して貼っていく。フォーマットをパワーポイントのデータで配信する。そこに、子どもの写真や板書の写真を掲載する。学びの軌跡を残していく。

④ 学年会で「子どものすてき紹介タイム」の実施

子どもが発揮した学びに向かう力、人間性等を見取り、言語化する取組である。課題解決や目標達成までの過程において、子どもが自然と「挑む」「やり抜く」「認め・支え合う」姿を自覚することは難しい。子どもが自覚するには意図的・計画的・組織的な取組が必要である。その一つが、②の取組にある学びの可視化である。もう一つが④の取組である。子どもと関わりながら過ごす教師が見付けた「子どもがすごいと感じた場面」「子どもの姿に驚いた(感心した)場面」を学年会で話してほしい。10分程度で毎週実施することにより、子どもを見取る力の更なる向上を目指す。見取る力が向上することにより、今までよりもたくさん褒めることができるようになる。子どもにとって身近な人からの称賛は、学びに向かう力、人間性等の涵養に欠かせない。

5 研究の運営

(1) 研究組織



(2) 授業研究

- ・大研授業研究及び研究会授業に向けた検討は、「チーム学年」を基本とする。一人一実践は別。
- ・チーム学年（研究主任、副主任を含む）で指導案の検討を行う。これをもとに、職員全体での指導案検討を行い、授業研究を行う。指導案の形式は後日提案する。
- ・大研では、**チーム学年で他学級での事前実践を踏まえて臨む**。指導案検討も含め、授業者に過度の負担にならないよう「チーム学年」で取り組むこととする。6月中、9月8日、10月下旬の3回の実施を計画中である。

- ・授業後に研究主任や学年の個別最適な学び部員が成果・課題をまとめ、**研究だよりとして発行**する。
- ・12月5日の研究会は、3本の授業公開を考えている。授業者については、管理職や個別最適な学び部で検討し、決定する。
- ・一人一実践のグループは、学年のバランスを考えて提案する。授業検討及び授業参観、協議会も行う。授業参観をする際は、級外職員や学年でサポートできる体制をつくる。なお、研究主任か副主任が全ての授業を参観し、研究だよりとしてまとめる。

〈研究授業のスケジュール〉

4週間前：学年会で授業構想検討（単元計画と本時の場面の決定）	示したのは、大研授業のスケジュールである。一人一実践の研究授業は、全体での検討は行わない。また、協議会は学年会で実施する。学年で指導案検討をする場合は、その学年の個別最適な学び部がリードして、進める。必要に応じて研究主任及び副主任が検討に参加する。
3週間前：学年で指導案検討（研究主任または副主任を含む）	
2週間前：全体で指導案検討（実施時期は、要相談）	
1週間前：指導案発送	
前日：全職員に指導案配付	
授業当日：授業後の協議会を全職員で実施する	
授業後：研究主任からお便りを配付。	

（３）年間指導計画及び単元計画

- ①年間指導計画は、4月段階で共有し、一年の見通しをもつ。重点単元も設定する。（学年）
- ②4月から7月までに実施した単元の関連や並び替えは、夏休み中に実施する。

6 日程

時 期（月）	研究活動	内 容
4月 2日 4月 4日	個別最適な学び部会① 研究全体会①	・個別最適な学び部で研究内容及び方向性の共有 ・年間の研究内容・方向性の提案 ・チーム学年で重点単元を決定し大まかな見通しをもつ ・12月5日研究会に関わる組織の提案 ・研究教科アンケート
4月下旬（予）	個別最適な学び部会②	・各学年の進捗状況の確認、一人一実践グループの提案（研究主任）
5月9日 5月上旬 5月中	研究全体会② 15：10～16：40 個別最適な学び部会② 生活・学習意識調査 項目の見直し	・中京大学大学院泰山様のご講演 ・指導案形式と授業参観方法の検討 ・生活・学習意識調査の学校独自の項目の見直しを行う。（教務と連携）
6月上旬	一人一実践開始	
7月16日 7月24日	・大研授業① ・夏季研究全体会①	・中京大学大学院泰山様来校→午後、職員研修。 ・4月からの中間まとめ ・研究会に向けた準備 ・9月大研授業指導案検討
8月25日	・夏季研究全体会②	・研究会に向けた係提案 ・12月研究会指導案検討①
9月8日	・大研授業②	・日程細案については後日提案
年間を通して	・学びの軌跡を計画的に作成	・重点単元の掲示物を全校で統一して貼っていく。フォーマットをワードのデータで配信する。そこに、子どもの写真や板書の写真を掲載する。学びの軌跡を残していく。

	・学習方法の紹介	印刷は、カラーの拡大機を使用する。インクや紙などの費用は、日本生活科総合的学習教育学会の補助金を使用する。 ・教室掲示用に学習方法の掲示物を作成する。
10月末まで	・大研授業③	・日程細案や指導案検討については後日提案
7月中旬	県小研学習指導改善調査	・4・5・6年生で実施・採点・分析
7・11月 夏・冬	生活・学習意識調査	・新潟市の生活・学習意識調査を行い、その結果を基に各学年で夏期休業中・冬期休業中に学年経営戦略会議を行い、成果と課題、次期への方策についてまとめる。 ※学校独自の項目の見直しを図る。(5月末までに)
2～3月	学校評価 研究全体会	年間の成果と課題を明らかにする。

※研究日程の中に、研究会運営に関わる会議を位置付けていない。新年度になり、4月の段階で研究会業務に関わる会議や打合せの大まかな見通しを示す。

7 参考引用文献

- (1) 新潟大学教育学部附属新潟小学校、一柳智紀（2016）「対話する」スキルで子どもが変わる！授業が変わる！
- (2) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編
- (3) 田村学（2018）深い学び 東洋館出版社
- (4) 小川雅裕（2019）授業のビジョン 東洋館出版社
- (5) 鹿毛雅治（2019）授業という営み 教育出版
- (6) 田村学（2021）学習評価 東洋館出版社
- (7) 小川雅裕（2021）すべての子どもを探究の主人公にする 本音で語り合うクラスづくり 東洋館出版社
- (8) 奈須正裕（2021）個別最適な学びと協働的な学び 東洋館出版社
- (9) 文部科学省（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）
- (10) マシューサイド（2021）多様性の科学 ディスカバー・トゥエンティワン
- (11) 文部科学省（2021）「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」（令和3年5月改訂版）
- (12) 奈須正裕（2022）個別最適な学びの足場を組む。 教育開発研究所
- (13) 谷 伊織（2023）Big Five パーソナリティ・ハンドブック 福村出版
- (14) 田村学（2024）「縦と横」で考えるカリキュラムデザイン 文溪堂
- (15) 中室牧子 「学力」の経済学 2015年6月 ディスカバー トゥエンティワン
- (16) 佐伯 胖「わかり方」の探究 2004年8月 小学館
- (17) 大島純 千代西尾祐司 学習科学ハンドブック 2019年9月 北大路書房
- (18) 大川繁子 92歳の現役保育士が伝えたい親子で幸せになる子育て 2019年9月実務教育出版
- (19) 鹿毛雅治 授業という営み 2019年8月 教育出版
- (20) ドロシー・ロー・ノルト レイチャル・ハリス 石井千春訳 子どもが育つ魔法の言葉 1999年9月 PHP
- (21) ボーク重子「非認知能力」の育て方 2018年10月 小学館
- (22) ピーター・グレイ著 吉田新一郎訳 遊びが学びに欠かせないわけ 2018年4月 築地書館
- (23) 安川康介 科学的根拠に基づく最高の勉強法 2024年2月 株式会社 KADOKAWA
- (24) 問うとはどういうことか 梶谷真司 2023年8月 大和書房
- (25) 科学的根拠で子育て 中室牧子 2024年12月 ダイアモンド社
- (26) 脳が認める勉強法 ベネディクト・キャリー 2015年12月 ダイアモンド社
- (27) 10年後のハローワーク 川村秀憲 2024年4月 アスコム
- (28) 学力喪失 今井むつみ 2024年9月 岩波新書
- (29) みんなの「今」を幸せにする学校 遠藤洋路 2022年4月 時事通信社
- (30) 「遺伝が9割」そして、親にできること ダニエル・ディック 2024年2月 三笠書房
- (31) すぐれた授業とはなにか 佐伯 胖 1989年3月 東京大学出版
- (32) 自己調整学習 木村明憲 2022年4月 明治図書出版
- (33) 自己調整方略 木村明憲 2024年9月 明治図書出版